

## すぎなみ大人塾 5/31「帰宅の時代」を語る～暮らしを楽しむ

平成 18 年度 すぎなみ大人塾 基調講演

「帰宅の時代」を語る～暮らしを楽しむ

講師：林 望さん（作家 書誌学者）

<http://rymbow.hp.infoseek.co.jp/index.html>

日時：2006 年 5 月 31 日 19：00～ 場所：セッション

司会：本日の講師、林望さんは「イギリスはおいしい」という本で、第 38 回日本エッセイストクラブ賞を受賞されまして、その後エッセイだけに留まらず、能評論や小説、料理、自動車評論など、多方面に幅広くご活躍されています。今回は、昨年出版されました「帰宅の時代」帯のところに、「団塊は個に戻れ」と書いてある本ですけれども、その本が大人の放課後をイメージして始めました今回の大人塾にぴったりという事で、今回ご講演をして頂く事に致しました。

林 望さんの基調講演

### 1 全体は一人のためにも機能する

今ご紹介いただきました林でございます。丁度「帰宅の時代」という本を書きましたもので、ここにお招きを頂いたと思っておりますが、実はわたくし今 57 歳です。団塊の世代の後半に属するという事で、とにかく大変な大人数の中で、芋の子を洗うようにして育てて来たと言うわけですが、ずっとひとひとり拝見しますと、私共と同年代の方も結構おられるように拝見を致します。

今から 6 年前になりましたでしょうか。丁度 50 歳になりました時に、わたくしは東京藝術大学の教官をしておりましたのを辞職いたしまして、そしていわゆる筆 1 本の生活になりました。しかし、「どうしてお前は、東京藝大の教官をそうさっさと何の未練もなく辞めてしまったのか」と、不思議がる方が随分いまして、「辞めない方がいいんじゃないか」と諫めてくださる方もありました。わたくしそれまで 20 年間大学の先生をやっておりました。その前、6 年間は高校の先生をやっておりましたので、そうすると 26 年間わたくしは教職にあったという事でございます。大学の教師といっても、高校の教師といっても、あるいは普通のサラリーマンであっても、これは 1 人でやれるという仕事ではなくして、組織の中に属してその一員として遂行する仕事でございます。そこでは組織の論理というものが優先をすると、これは動

## すぎなみ大人塾 5/31「帰宅の時代」を語る～暮らしを楽しむ

かない事実であります。いくら自分が「いや、俺は組織の論理には流されない」などと言ってみても、組織の一員である以上は、どうしても組織の論理を無視しては生きていけない訳で、そういう人はだんだんとつまはじきされてしまいます。そうすると個人のまったく個としての物書きの仕事と、組織の一員としての大学教官の仕事っていうのは、そのどちらもだんだん忙しくなってくるにしたがって、鋭い矛盾を含んで来るという事になります。

元々わたくしは、イギリスに足掛け3年ばかりいました。イギリスのような西欧型の社会は、組織といっても個人が集まって組織になっているという、そういう感じがします。ところが日本の場合は、組織があって、そこにまず歯車として1人の人間を雇うというような感じですが、例えば1人は全体の為に、全体が1人の為にという言い方がございますけれども、この1人が全体の為にという事は、日本人も良く判るのです。滅私奉公などと言うのがそれですが、全体は1人の為にという所になると、個人と組織が双方向に通わなくなってしまう。そういう何か日本社会の独特の流れの悪さのようなものがあります。

つまり、いったん組織に属してしまうと、その中ではなかなか個というものを主張出来ない訳です。それをあながちに主張すると、どうしても周囲との軋轢が起こって、いろいろな不都合、文句を言われたり、いじめられたりとか、そういう事が起こって参ります。

元々、個人というものがあって、全体組織というものがあるとするならば、そこには組織の中の公人としての自分と、そこから離れたプライベートな自分というものが、鋭く区別をせられていなければ、西欧型の社会と言うものは、成立しない訳です。

例えば、銀行に参りますと、ある日突然私の口座がストップしてしまっただとします。「なんでこの小切手が落ちないんだ。預金があるのにどうして小切手が落ちないんだ」というような事があるのです。そういう時にさっそく文句を言いに行きます。そうすると日本ならば銀行へ行って文句を言う時に、「俺の口座の担当者は誰だ」とは言わないでしょう。預金通帳出して「これこれ、かくかくしかじか」と言うと、誰が責任を取るのか判らない様な形で処理します。組織として処理をしてくれる訳です。

ところがイギリスの場合は、「ちょっとお待ちください。あなたのアカウントの責任者は、なんとかなんとかという奴だから、ちょっとその奴を呼ん

## すぎなみ大人塾 5/31「帰宅の時代」を語る～暮らしを楽しむ

できます。」というような事になって、「すみません。あなたの口座の担当者は現在夏休みで、次に来るのは2週間後の8月23日になりますが」とか言われる訳ですよ。「それまで私の口座使えないの」と言うと、「ええ、残念ながら」とか言うんです。

そういうのが平気なのです。「そんなの冗談だろう」と思うかもしれないけれど、そういう事は本当にごく普通に起こる訳であります。だから、ビジネスと言っても、誰がこのビジネスについて責任を持っているのかということと常に非常に意識している社会だから、自分の仕事を他人に任せるということではない訳です。この契約については、私が責任者だということ、私が休んでいる間は、「その契約についての話はちょっと待ってくれ」ということになる。

他の奴が変わりにそれをどうこうしたら、越権行為になっていく訳です。西欧の場合は会社というのは、そういう個人の集まりという性格が凄く強いのです。でも、それでは不便ではないのかと思うかもしれないけども、不便ではないです。

なぜならば、文句を言いに行く方も夏休みを取るからです。「そう言っただって、お前だって取るじゃないか」と言われると、一言も無い訳です。武士は相身互いと言うか、お互い様というのが、市民社会の約束事なので、この公私が全然交じり合わないというのが、当然の原則であります。

そうすると、例えば公は、会社が例えば、夕方の5時までだとすると、これは契約ですから、5時までが勤務時間です。それ故5時になったら契約は及ばない訳なので、仕事が途中でであろうとなんでであろうと、例えば手紙を書きかけて、文章が途中でであろうと5時になると帰るとというのが、このイギリス的な行き方なのであります。

ところが日本の場合は、会社に何時までいるか分からないではないですか。全体が1つの仕事をしていて、誰の責任とも分からず仕事をしているものですから、1人が帰らないと全員は帰りにくい訳です。で、酒を飲みながら何か取引の話をするとか、翌日の打ち合わせをするとかいうのは、これは皆仕事の内であって、少しもプライベートな生活ではない。そういう公私というものが、一緒くたなのが日本の組織のあり方です。

例えばもう1つ言うと、転勤という制度がありますね。転勤という制度をわたくし共は、なんの疑いもなく「しょうがないんだ」と、思っております

## すぎなみ大人塾 5/31「帰宅の時代」を語る～暮らしを楽しむ

けれども、本当に転勤は、必要だろうかと突き詰めて考えて見ると、それは怪しげな物だと思います。

例えばきちんと家族がいて奥さんがいて子供がいてとします。奥さんは仮に学校の先生をやっていたとしましょうか。妻としてのなにかキャリアをきちんと積んでいると。ところが夫が明日から大阪へ転勤してくれと言われた。問題はどうかです。それでは転勤という制度は、奥さんが自分のキャリアを諦めて、職場に辞職願を出して、夫の転勤に付いていくのか、それとも付いていかないで、夫を1人で転勤させるのかという、こういう地獄の選択しか無い訳です。仮にそれで転勤した夫が、大阪の方でいろいろ様々な事態が生じて、夫婦別れをしたという事になりますという、これはそういう事をさせた会社の責任です。日本の場合には、例えば家族と一緒に住まないといけないとか、夫婦はいつも一緒に住んでいるのが原則だとか言っても、実際には実現し難い訳です。

今まで何の不思議もなく転勤制度が実現していたのは、女のキャリアというものが無かったからです。奥さんというものは、夫にどこへでも付いていくものだっていう前提で出来ている訳でしょう。

ここからやはり考え直して行かないといけないのです。転勤という制度は、公の権利による私の生活への侵略です。もしこれを同じ事をアメリカでやったらどうだろうか。イギリス人に「イギリスではどうか」と、聞いてみた事があります。もし、アメリカで同じ事をして、これが為に夫婦にひびが入ったとなれば、確実に訴訟になって、会社は何億と言う金を取られると思います。

そういう事が組織の論理として、まかり通っているという事は、つまり全体は1人の為にとという機能が働いていない訳です。1人は全体の為に良い効果を与える、けれども、全体も1人の為により効果を与えるというこの両方が働かないと、市民社会というのは、健全だと言えないと私は思っております。それは何故かと言うと、1人1人が責任を持つという体制には出来てないから、全員でやっていくという体制になっているからなのでございます。そこで西欧型の世界と、日本型の社会とは非常に違って、一見すると日本も西欧並みになったように見えるけれども、その内実は違うという気が致しております。

どちらが良いか悪いかではないのです。お客さんからすれば日本型の社会

## すぎなみ大人塾 5/31「帰宅の時代」を語る～暮らしを楽しむ

は確かに非常に便利だし、絶え間なくビジネスは続いて行く訳ですから、「担当者がいないから、お前2週間先まで待て」と言われた時、銀行に行ってそのような事を言われたら、本当に頭に來ます。

今の転勤の問題なんかでも、奥さんに子供を預けて、「俺は1人単身で行こう」と言う事になりますが、考えて見るとその預けられた奥さんは大変です。そうではありませんか。夫は1人で気楽に独身生活を謳歌しているのですから、それは多少の不便ぐらいはあるかも知れないけど、そのようなことは文句を言うにあたらぬ。だけど、奥さんは、子供の子育てから自分の仕事から、何から何までやらなくてはいけないという事になる。社会が原始的な程、女の労働は増えると言う、これは社会学上の常識であります。

原始社会では大半は女が働いて、男は遊んでいるのです。そういう意味でいうと、日本もまだまだ原始社会に近い所があるのではないかと思います。そんなような事もいろいろございまして、どうしても組織の論理が優先するのが、日本の社会だと思えます。

### 2 組織から脱却をする

組織から脱却して、自分自身の生活を確実に取り戻すには、どうしたら良いかと言うと、やはり組織を抜けるよりしょうがないんです。ですからわたくしは勇気を持って組織を抜けたと言うわけですが、僕は組織を抜けてみて大変驚きました。日本という国は、やはり組織に属してないと、何にも出来ない国なのだということ、本当に身に沁みて感じます。

何故と言って、わたくしは辞めてから、物書きとして一定の名声もあり、収入も十分に安定してあるという状態の中で、子供の為にマンション買おうと思ったのです。それに付いて2000万円だかそこらのローンを借りようと思った。そうしたら銀行は、作家業ではローン貸せないと言うのです。

これは、自由業なんてのは、要するにやくざな商売とみなされるのですね。結局ローンを貸してくれなかったんで、わたくしは買う事が出来なかったのですよ。そればかりじゃなくて、例えば退職金等でも日本の組織というものは、定年まで居るとちゃんとたくさんくれるのですが、途中で辞めると懲罰的に減らされる仕組みです。ですから、わたくし生涯に貰った退職金と言うのは、20年間も勤めていたにも関わらず、僅に320万円位しか貰っていない。これが定年までおりましたら、千万単位のお金が貰えたと思えます。それではとわたくしは失業保険貰いに行こうと思ったのです。そうしたら、「お

## すぎなみ大人塾 5/31「帰宅の時代」を語る～暮らしを楽しむ

前のようなのは、失業保険はくれない」と言われました。

とうとう失業保険も貰えないし、退職金も貰えないし、つまり独立の仕事をしている人間に対しては、おそろしく冷たいというのが日本の社会の在りようだという事をつくづくと身に沁みたのでございます。

そうあっても、「じゃあ辞めなきゃ良かったじゃないか」と言うかも知れないけれど、それでもやっぱり辞めなければならないというものがあつた。何故かと言うと、人生は有限だという事をつくづく思うのです。まだ 50 歳くらいだと、そんなに有限って感じはしないのですが、でも指折り数えて見れば 57 ですから、そうすると 70 で死ぬとして、後 13 年しか無い訳です。わたし算数得意じゃないですから、計算間違えが多いですけども、もう 13 年位しかないでしょう。50 歳の時にまだ 20 年もあると思って辞めたのですけれども、あれよあれよと言う間に後 13 年になってしまった訳です。

けれどもその中で自分がやりたい事というのは、いっぱいあります。だから、一刻も時間を無駄に出来ないという風にいつも思っております。「そんなのは 70 で死ぬと決めなくても良いじゃないか」とお考えかもしれませんが、命というものは死ぬという事だけが確実であつて、その他の事は絶対に不確実だと、こういう事になっております。

だから、そういう覚悟をして暮らさなければいけないと思つたのです。「まだまだ大丈夫だ」と、「まだ何十年もある」と、楽観的に思うのではなくて、一刻も猶予がならないと思つたならば、安閑として組織の為の仕事なんかしてられない、そういう風にわたくしは思つて自分 1 人の生活に戻る事にしました。

### 3 表現者になりたい

じゃあそれは一体どういう事をしたいのか。わたくしの場合は、あくまでも何かいつも表現という事をしていきたい。表現というものがわたくしの天職ではないかと思つているのです。ずっと昔の事を思い出すと、高校生ぐらいの時に「自分は何になりたい」と、思つただろうと思ひ返してみました。

どなたも皆そういう若いまだ未来が不確定な時に、自分が何をこれから一生やって生きていきたいのか夢のような、なにかがあると思うのです。わたくしは、これはとても大事だと思うのです。実際にはどんな夢を抱こうとも、その夢は実現しないのが普通だと思います。夢がずっと実現してしまうという事は、ないだろうと思います。そんなに簡単に実現してしまう夢は、おそらく夢で

## すぎなみ大人塾 5/31「帰宅の時代」を語る～暮らしを楽しむ

はないので、それは凄く小さなどうでも良い事だと私は思います。なかなか実現しないからこそ夢なのではないかと思うのです。

わたくしは高校生の時に、ごく真面目なラグビー少年でありましたけれども、日々勉強に追われながら、「じゃあ、これから大学に行って、1人前になって何をしたいんだろう」と思った時に、わたくしは詩人になりたいと思ったのです。

もちろん若いときに詩人になりたいと思う人はいっぱいいると思うのです。だけど、なかなか詩人というものは、なろうと思ってなれるものじゃございません。詩人のオーディションがあって、それに合格すると明日から詩人という訳にはいかないし、詩人会社ってものがある、そこに入ると皆詩人にして貰えるという訳でもない訳です。

詩人になるという為には、何か自分の日々の暮らしと別にきちんと考えて、その生活が立つようにして、そして尚且つ詩を書く事を諦めないという魂が必要だと思うのです。詩では食って行けませんから。それで、その次に僕は作家になりたいと思ったのです。幸いに今そうになりましたけれども。

その頃そういう風に、物を書いて表現をしていく人間になりたいなという風に思ったその思いだけは、胸の中に消えずに残しておいたのです。けれども、食えないから一応人並みに食べる事をしなければいけない。何をしたら良いかなと、思いまして「じゃあ、まあ学問でもしょうか」と、思ったのです。そういう事を言っただけで学問に失礼でございますけれども、自分に出来るのは学問かなと思ったのです。

学問といっても、何がやりたいかなと思った時に、わたくしは高校生の時からそうですけれども、現代文学は読めば判りますので、別に教えたり教わったりするに及ばない。けれども古典文学って言うものは、中々あれはそうすらすらと読めないものですから、これは教師となって、人に教えるという事は必要な事だろうと。

わたくしは高校を卒業する時に、最後のホームルームで担任の先生が「お前達、卒業するに当たって将来何になりたいか一言だけ言っていけ」と言ったのです。わたくしは迷う所無く「国語の教師になる」「私は国語の教師になって、この学校に戻ってきます」と、言った覚えがあります。

ですから、なんの迷う事もなくわたくしは文学部に進み、国文学を専攻し、そして大学を卒業と同時に大学院に進みました。私はいっぺんも就職活動を

## すぎなみ大人塾 5/31「帰宅の時代」を語る～暮らしを楽しむ

した事はありません。大学卒業する時に就職活動をしようとも思わなかった。大学卒業したら、直ちに大学院に進むものだと、このように思い込んでおりましたので、面接にも行った事がないし、就職って事を考えた事すらなかったのです。大学院に行って修士課程を終えて、今度はもう1回入試を受けて、博士課程に進んで、博士課程を終えて、そして高校の先生になったという、こういう様な経歴です。

学問とか教育とか、古典文学の世界とかをずっと歩いて来た。その間中、この表現の魂というか、詩とか小説とか、そういうものを書きたいという気持ちが消えた事は、1度もないのです。そうすると、やはりどこかで、そういう思いというのは、噴火して来るもので、丁度マグマが地底にあってやがてはそれが噴火して来ざるを得ないというような具合です。

わたくしは現在いちばん敬愛する詩人は田中冬二という人です。田中冬二という人は、私の考えでは近代詩の中で最も美しい詩を作った人だと思います。最も新しい詩を書いた人は、萩原朔太郎だと思いますけど、最も美しい詩を書いたのは、田中冬二だと思います。日本語の美しさをとことんまで突き詰めていった人が、田中冬二と言う人で素晴らしい詩人でございます。

堀口大学なんかの影響を受けながら、素晴らしい詩を書いた。この人はずっと一生銀行員だった人です。定年までちゃんと銀行の支店長を勤めて、一方で真面目な銀行員と言う肩書きがありながら、ずっと詩を諦めずに書いた人です。石垣りんさんもそうです。

そういう風に諦めずにずっと心の中にそういう魂を持っていれば、仕事は何であろうと出来るといえば出来ると思います。しかし僕は、50歳になった時に「もう、先はあんまり無いかもしれない」と、思いました。というのは、大きな1つの夢があるからです。それは何かと言うと、わたくしは日本文学ずっと古典文学を若い時から、ずっと勉強して来て、おびただしい古典文学の作品を読んで来ましたが、何が素晴らしいとって、日本文学の中で古今第一の文学というのは、疑いなく『源氏物語』です。

源氏物語ほどの作品は、前にも後にもひとつもありません。これは何も日本の文学史だけではなくて、世界的に見てこれ程の作品と言うのは、おそらく数えるほどしか無いだろうと思います。尚且つ、これは千年前に書かれた物です。千年前というような時代に、ヨーロッパではいったい文学なんかあったかという、旧約聖書の物語ぐらいです。



## すぎなみ大人塾 5/31「帰宅の時代」を語る～暮らしを楽しむ

ああいう人間心理の絢を微に入り細を穿って、見事に描き出した源氏物語というのは、読んで行くと1ページ、1ページ、良くもこれだけ人間の心理を見事に描き出したなと思って、感心してしまいます。ため息が100回位出るのです。あまりに素晴らしいので、これは奇跡だと思うのです。

あれを書いたのは、女の人で紫式部一人とは言わないけれども、いずれにしろ平安の女房達を書いた文学です。にもかかわらず、そこに登場してくる男達の心理が良く書けている。「男心はこうよな」と言う事が、きちんと書かれている。女から見たら「こうだろうな」男から見たら「こうだよな」と言う事が全部書かれています。

素晴らしい物なので、わたくしは何とかこれをただ単に現代語訳するのではなくて、もう一度読み直すと言いましょか、54巻もあってあんなに長くはみんな読み切れないではないですか。だからその中から、特定の人物を選び出して、その人物の一代記みたいな形で、再構成するような形で、『林源氏』と言うのを書きたいと思うようになりました。

そう言うやり方は、『平家物語』で既に試みまして、『往生の物語』という本を書きました。

これは『平家物語』に出てくるおびただしい人物の群像を1人1人腑分けいたしまして、重衡の一生はどうであったか、能登守教経の一生はどうであったかという風に、それぞれの人にずっと一代記的に追って行って、その死にざまはどうであったかという事を描いた書物で、わたくしが今まで書いた90冊の本の中で、いちばん愛着のあるのはこの本です。

古典文学というだけで、世の中の人には読んでくれません。でも、この本は読んで頂くと、絶対面白いと思います。わたくしが渾身の力を以って書いた物でございます。そこで、同じ事を『源氏物語』でも試みたいと、しかしこれは、おそるべき大仕事です。『平家物語』は、12巻しかございません。岩波の古典大系で言うと、上下2冊で収まってしまいます。けれども、『源氏物語』は54巻ありますので、と言う事は岩波の古典大系でも5冊になっております。尚且つ古文として『平家物語』は、簡単です。現代語訳が無くてもすらすらと読めるほど、よみやすく書かれています。それは当たり前で、あれは琵琶法師が語った物だから、文字を読まなきゃ判らないように書いていたのでは話しにならない訳で、耳で聞いて解るようになっていいるから言葉が大変簡単なのです。こう言って見れば、ラジオドラマの形で書かれており

## すぎなみ大人塾 5/31「帰宅の時代」を語る～暮らしを楽しむ

ますのでよろしいのですが『源氏物語』となると、とてもそうは行きません。

わたくしなどは、古典文学をずっと長い事しておりまして、『源氏物語』は、注釈書と首っ引きで辞書を引いたりしながら考え考え読まない、何を言っているのだから解らない所が大半です。だから、スピードが出ませんし、しかも尚且つ複雑に筋が入り組んでおりますでしょう。

『源氏物語』は、ここに出てきた人が、この巻では消えてしまって、次は3巻置いた向こうへ出てくる。この時とこの時は実は同じ時点だというような事がいっぱいあるのです。だから、クロノロジカルに言うと、どこが同じでどこは空間が違って、同じ人物でもある巻で「頭中将」と言ったかと思うと、別の巻では「左大臣」といったり、いろいろ呼び方も違うので、誰の事だかも解りにくい訳です。

そのような事がありまして、『源氏物語』を読むのは容易な事じゃない。そうするとこれを実際来实现する為には、わたくしには時間が必要だ。というようなわけで、自分はこの、「物を書く」という仕事を自分の天職と見極めて、これ1本で行きたいところだった。

わたくしの場合は、詩人になりたかったという事がございませぬけれども、詩も書くようになりまして。詩集も何冊か出しました。詩論ですね、詩を論じるそういう講義だとか、講演なんかも随分致します。今年の秋は、自分の出身母校の慶応大学の文学部でも、詩学というのをやる事になりました。

そういうのは、やっぱり諦めずにやっていると、段々と实现に及ぶ訳であります。いちばんいけないのは、諦めてしまう事なのです。

それで、詩を書くようになったと言う謂われは、わたくしが藝大に行きました時に、わたくしの前任者は大岡信さんという詩人の方だった。その前任者は沢木欽一さんという俳人です。

ずっと遡って行きますと、「箱根八里」を作った中島枕だとかですね、春のうららの隅田川の「花」というのを作った武島羽衣だとかですね、日本の歌を作った詩人達が、ずっと藝大の国語教官として任官して居たという歴史があって、その歴史の末にわたくしが連なっていた訳です。

だから、歴代の藝大の国語教官というのは、みな作曲家と手を携えて、創作歌曲だとかオペラだとか、いろんな物を創作するという、そういう伝統がございましたので、わたくしは大変嬉しがって、作曲家達と一緒に随分多く

## すぎなみ大人塾 5/31「帰宅の時代」を語る～暮らしを楽しむ

の歌曲やらオペラやら合唱曲やら、そういう物を創造するようになりました。

今もうすでに、わたくしが詩を書いた歌曲は、100曲を超えています。それは皆、藝大出の本職の作曲家が作曲をして、おもに藝大系の歌手達が歌ってくれている訳でございますが。そういう中で、やっぱり自分としては、自分の作った歌を自分も歌いたいじゃないかと思うわけです。最初は幾ら詩を書いて歌を作っても、誰も歌ってくれないですしね。

### 4 ソルフェージュ・・・、自分の作った歌を自分も歌いたい

そこで、「しょうがない自分で歌うか」という事になりまして、それで自分の歌の稽古をしなきゃいけないという事で、声楽を習い始めてから15年になります。ようやくこのごろ少し声の出し方が纏まって参りまして、いろんな所で歌って満天下に恥を晒しつつですね、暮らしております。

そうするとやはり、ここで今度は自分の歌を歌うという形の表現がまたそこに、1つの可能性として出てくる。なにごと諦めてはいけないのです。例えば、歌を歌うということ一つ考えて見ても、子供の頃からやってない人は駄目じゃないかという風に思うかもしれませんが、そんな事はありません。

確かにピアノとかバイオリンとか子供の時からやらないと駄目ですけども、歌だけは幾つになっても始めても遅くはないのです。私の場合は、子供の頃から音楽はやっていましたので、楽譜はある程度読めた事と、音程は割合正確だった。そういうので幸いに歌を歌うのに困らなかったのですが、それでもぱっと楽譜を渡されて、「これ歌ってみろ」と言われて、なかなか歌えないですよ。そうじゃありませんか、それが歌えたら本職です。それで僕は歌手の諸君と一緒に、歌の練習しながら、「どうして君たちは、楽譜見るとぱっと歌えるの」と、聞いたのです。「それは林さん。そのための練習をするからですよ」と言われて、なるほどそういう練習があるのかと思って、つまり「ソルフェージュ」のことですけども、それでは、早速僕もソルフェージュを練習しようと、こう思って藝大の作曲家に弟子入りをしまして、50歳になってから、ソルフェージュの稽古を始めました。最初はなかなか読めませんでしたけれども、今はピアノの伴奏さえあれば、ほとんどすらすら読めるようになりました。だからソルフェージュ能力みたいな物は、子供の頃からやらないと出来ないというのは一般的な事ですけど、そうじゃないという事を知って、僕に教えた人がびっくりした。「こんなおじさんになってからでも、ソルフェージュの能力が身に付くのだと思って、大いに見方を

## すぎなみ大人塾 5/31「帰宅の時代」を語る～暮らしを楽しむ

改めた」と、言っておりました。

### 5 諦めなかった人々

どんな事でもわたくしは、年を取ったからといって、諦めるには及ばないと思うのです。ここにシュリーマンの「古代への情熱」という本がございませけれども、シュリーマンという人も、もともと家が没落して貧乏だったものですから、若い頃はずっと貿易なんかの仕事に携わっておりましてね、だけど彼は子供の頃に読んだ「トロイの遺跡」を発掘するという夢を、ずっと失わずにいたのです。

そのためには、ギリシャ語を読めなきゃいけない、ラテン語も読めなきゃいけない、そうなったら毎日仕事が終わってから、夜中に徹夜のようにして外国語を勉強するのです。彼は十何ヶ国語に、全部通曉してしまう訳です、激しい仕事をしながら。それは「シュリーマン自伝」に一部始終が書いてあります。46歳になった時に、一切の仕事から引退して、自分の財産を一切そのトロイの発掘に費やして、そして古代史家として一家を成す訳ですね。それから本居宣長の学問論ですけど、「うひやまふみ」というものがある、ここにも学問は幾つになっても諦めてはいかんという事を書いてある訳です。また、才能があるないという事で、自分に諦めてはいけないんだという事をいっている。本居宣長先生は「人々の才と不才とによりて、その功いたく異なれども、才不才は生まれつきたる事なれば力に及び難し、されど大抵は不才なる人といへども、怠らずつとめだにすれば、それだけの功はあるものなり、また晩学の人もつとめ励めば、思いのほか功をなす事あり」と言うのです。「また、暇の無き人も」忙しいから、そんな学問なんかやっつけられないとか言うのは、それはごまかしだと言うのです。

「暇の無き人も思いの他、暇多き人よりも功をなす物なり」暇にしている人は、案外何もやらないものだけれど、「忙しい、忙しい」と言っている人ほど、一生懸命つとめて、そして成果をあげるものだと言うのです。だから、「されば才ともしきや学ぶ事の晩きや暇の無きやによりて、思ひくづおれてやむることなかれ、とてもかくてもつとめだにすれば、でくるものところふべし。すべておもひくづおるるは、学問におほきに嫌ふことぞかし」と書いています。宣長は、一生学問にその命を捧げた人で、大変な大学者でございませけれども、その人にしてこの言ありと思います。

これは「Time is Undone」という詩集でございませ。「グリ - ノウの物

## すぎなみ大人塾 5/31「帰宅の時代」を語る～暮らしを楽しむ

語」で有名なルーシー・マリア・ポストンさんが、ごく晩年に近い頃に自費出版した極めて珍しい詩集です。おそらく日本では誰もご存知ないと思います。紹介されておりませんので。このポストン夫人という方は、大変お金持ちのお嬢さんだったけど、若い頃看護婦になりましてね、そしてヨーロッパの第一次大戦なんかの時に従軍をして、それから画家になったりオックスフォードでラテン古典学なんかを修めたりした人です。

そしてそういう看護婦なんかとしての人生をずっと送って来まして、作家となったのは、65歳の時であります。65歳の時に「Chirdren of Greenknowe」(グリーン・ノウの子供達)という作品を書いて、彗星のごとく文壇にデビューをして、そして68歳の時に「Enemy of Greenknowe」(グリーン・ノウのお客様)という本で、カーネギー賞という世界的な児童文学の文学賞を取って、高名な作家になられた人です。その方が、僕は偶然にその人の家に住んでいた訳ですけれども、84歳の時に書いたのがこの詩集です。

つまり、詩というような物も、日本では若者の手すさびのように考えられておりますけど、それはそうじゃないので詩の魂というようなものを失わずにいれば、いくつになっても瑞々しい詩集を書くことができる。わたしがお目にかかったのは91歳のルーシー・ポストンですけれども、84歳のときこの詩集を書きました。「Time is Undone」とは、「時を巻き戻して」とでも言う様な意味だろうと思います。

この詩集の一節、Come away , come away , my darling という詩を読みます。

Once by a stream that sang eternity  
I kissed my love and he kissed me.  
Long hours I lay in his breast.  
And found sweet rest.  
Sing birds ,sing stream,  
He whom I love is with me.

Now in this mountain-haunted room  
The dancing murmur folds me  
As if my life were laid out dead

すぎなみ大人塾 5/31 「帰宅の時代」を語る～暮らしを楽しむ

Here on this foreign bed;  
The breathing window curtains lift and fall  
And that is all.  
' Sing birds,sing stream,  
He whom I love is with me.'

In life or death  
Though I draw separate breath,  
Yet on my brow the country-scented air  
Stirs like his hair,  
And if my heart is still  
It dose his will.  
Sing birds,sing stream,  
He whom I love is with me.

『さあ、逝きましょう、いっしょに』( 詩集「新海潮音」より林望訳)  
むかし、悠久の瀬音を歌っていた小川のほとりで  
愛する人と、たがいにくちづけして  
何時間もじっとあの人の胸に抱かれていたとき  
私は、甘美な安らぎを知りました。  
鳥たちよ、歌って、小川よ、歌って  
私の愛する人は、私のそばにいます。

いま、この魑魅魍魎の徘徊する部屋で  
跳ね回るあやかしの声が私を取り囲む  
まるで、私の命が、この居心地の悪い寝床のなかで  
死に搦め捕られようとしてでもいるかのように。  
窓辺のカーテンは息づくごとく風に煽られ、また静まり  
そして、それっきり。  
「鳥たちよ、歌って、小川よ、歌って  
私の愛する人は、私のそばにいます」

## すぎなみ大人塾 5/31「帰宅の時代」を語る～暮らしを楽しむ

生死のはざまにさまよい  
虫の息となったとしても  
そのとき、私の顔に、なつかしい田舎のにおいのする風が  
あの人の髪のように、そよいでくる  
そうして、もし私の心臓が止まったとしたら  
きっとあの人が迎えに来たに違いない  
鳥たちよ、歌って、小川よ、歌って  
私の愛する人は、私のそばにいと

とこいう詩です。どうですか、ロマンティックでしょう。こんな瑞々しい詩を創られた。これ詠んだのは 84 歳のおばあさんですから、まだまだ皆さん若いですよ。エロスが充満しておりまして、瑞々しい表現に満ちておりまして、とても素晴らしい詩集です。こういう物がこんな歳になっても書けるという、そういう事を思ったならば、「おちおちとしてられないぞ」と、思うのです。時間は有限です。人生も有限です。ですけれども、しかしその有限の中で、無駄な時間を過ごしていれば、あっという間に燃え尽きるだろうと思います。

だから、いちばんいけないのは無駄に時間を使う事だという風に思っておりまして、わたくしは幸か不幸か全く酒が飲めない。これは本当に幸いだったと、思っている所であります。酒飲んでしまったら、1日5時間位すぐ無駄になってしまいます。

そんな事で、ずっと組織を離れてから個人として、ようやく自分は今スタートラインに立ったという感じが致します。自分がやりたい表現をしていくという仕事がようやく軌道に乗った。でも、『源氏物語』にはまだ辿り着かない訳です。『源氏物語』をやる為には、時間が必要です。雑々なる仕事は全部断って、それに没頭して恐らく数年かかるだろうと考えています。

だけど、それはよっぽどお金が無いと駄目ではないですか。『国家の品格』みたいなああいう 250 万部も売れる様なベストセラーが、1つでも出ればわたくしは即座に他の仕事辞めて、『源氏物語』に取り掛かるのですが、なかなかその 250 分の 1 も売れない物ですから、それをする為には一生懸命自分出来る事をやって、そして子供もちゃんと育てて、この子供が仕上がったら後は自分の為に一生懸命お金を貯めて、そして 70 歳までにあと何年か残

## すぎなみ大人塾 5/31「帰宅の時代」を語る～暮らしを楽しむ

るであろうと、そしたら一切他の事をやらないで、『源氏物語』を書くんだという、そういう夢を持ちながら今は自転車操業で、こうしてこのような所まで一生懸命話をしに来る訳なのであります。